

# 聞名仁教

第 184 号 毎月発行  
(発行日) 2026 年 1 月 1 日  
発行所: 真宗大谷派念佛寺  
〒 663-8113 西宮市甲子園  
口 2 丁目 7-20  
JR 甲子園口駅下車歩 4 分  
電話 (0798・63・4488)  
(発行人) 土井紀明  
<http://nenbutsuji.info/>  
アドレス nenbutsuji6@gmail.com  
ゆうちょ銀行(ドイノリアキ)  
記号 17810 番号 7259431

## 《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉  
毎月 22 日 午後 2 時始  
(8 月は休みます)
- 〈念仏座談会〉 8 月は休み  
毎月 12 日 午後 3 時始
- 〈「聞名の会」法話・座談〉  
毎月 6 日 午後 7 時始
- 〈真宗入門講座〉(副住職担当)  
毎月 18 日 午後 6 時 30 分始

## 安心のよばさ 佐々木蓮磨

真宗においては、古来「安心の調理」ということが厳しく行われてきたものです。

これは真宗の信心というものが、他力廻向であって、凡夫の心を固めるものではないというところからやましく言われるようになってきたものと思われまします。しかし、あまりにやかましく言うことになる、かえって人間の権力が働くようになって、仏道の本義を見忘れる結果になりかねないのであります。

香樹院徳龍師は、大谷派におけるズバ抜けた名師でありました。徳川の末期は、真宗興隆の黄金時代で、それを雄弁に物語るものが、大谷派本願寺に飾られてある有名な毛綱でありましよう。ところが反面にまた異解異安心の論争も随分あちらこちらに起こって、当時

の学者を悩ましたものであります。

そのころ、江戸に信心安心の問題が起こり、両論対立して治まりがつかぬので、山命を受け香樹院が江戸に出張されたのであります。双方の論者は、なかなかの論客ぞろいで、容易に屈服しそうに見えなかったのですが、香樹院は双方の代表者を浅草御坊に呼び、ことば柔らかにおっしゃるには「ツマ上がりツマ下がり」ということは着物を着たうえの話、丸の裸にはその論はないぞ」と一言おおせられたところ、双方の代表者は一言も述べることなく、随分長かった安心論争が師の一言で片づいたのであります。

師は常に称名念仏を相續しておられたので、法中の中には、香樹院は称名正因(称名を往生の正因とする

異解者のこと)だと悪評するものすらあったのであります。しかし、師の威徳を恐れて直接忠告するものはなかった、師の社中(教えを受けている門人)が心配して、恐る恐る師に向つて、

「近ごろ世間では、お師匠を称名正因の異解者ではないかと評する輩がおりますが、いかがなものでしょうか」

と申し上げると、師は容かたちを正して、

「そうか、自分を称名正因というものがあるか、それは大きな見そこないをしている。自分などはとても称名正因と言われるほど熱心に念仏は称えておらぬ。さればと言って、ご恩報謝の念仏を称えているかと言えば、とうていそういう尊い念仏は称えきらぬ。自分の念仏は、幼いころから親が念仏せよ念仏せよと、やか

ましく仕つけられたので、それが癖となつて、ときどき口に出るだけのものである」

と答えられたそうであります。なんというスッキリとしたお答えでありましようか。

この答えは到底学解によつて出るものではありません。他力の信に徹した人にして始めて言えることばで対する全面的の否定です。これは人間の知性では不可能なことです。如来の仏智によつてのみ始めて知らしめられる人間像でなくてはなりません。

この自己否定を受けておられたがために、他人の安心問題に対してもスキのない批判を下すことができたものと思います。真宗一派の聞法道は、このように厳しい自己否定を受けて行く道であります。

# 清沢満之先生に学ぶ⑧

## 『清沢満之先生の言葉』

何をか修養の方法とな

す。曰く、<sup>すべから</sup>須く自己を省察すべし、大道を見知すべし。大道を見知せば、自己にあるものに不足を感じることなかるべし。自己に在るものに不足を感じざれば、他にあるものを求めざるべし。他にあるものを求めざれば、他と争うことなかるべし。

自己に充足して、求めず、争わず、天下何の<sup>いずれ</sup>処にか之より強勝なるものあらんや、何の処にか之より広大なるものあらんや。かくして始めて、人界にありて独立自由の大義を<sup>はつよう</sup>発揚し得べきなり。

此の如き自己は、外物他人のために傷害せらるべきものに非るなり。傷害せらるべしと憂慮<sup>ゆうりょ</sup>するは、妄念妄想なり。妄念妄想は之を除却せざるべからず。

\* \* \*

この言葉は清沢先生の意気軒高な仏教求道の道を表わされた文章です。仏教復興の高調した明治時代の意気込みが感じられます。

清沢先生の教えは単に仏教教義を語るのではなく、人生の苦悩からいかに脱却し、精神の自由を得るかというのが一貫した内容になっていて、悩み多き現代人である私たちにも訴える内容になっていきます。ただ明治時代の文章ですのでこの時代によく使われた言葉でもって述べられています。では本文に沿って解説してみましよう。

「何をか修養の方法となす」とは「どのようにして真実を求めるのかといえよ」といわれます。どうしたら本当の幸せを得ることができるかといってもいいでしょう。それは「自己を省察すべし」で、一番身近な自

分を問題にし、自分を顧みよといわれます。一番身近な自分を

離れて、外に真実を求めてもダメだといわれるのです。自分を省察すればそこに「大道」を見出すことができるというのです。

ここで、自分を省察しなさいといわれるのですが、ここでいわれる省察というのは、自分の行いの是非善悪を反省するとか自分の考えや心の内容を分析したり観察したりすることではなく、今ここに自分が生きている事実、足下の事実を観るといふか感知する、あるいはもつと正確に言えば「今ここに生きてはたらいっているなにかに触れる」という意味でありましよう。

しかしこれは易しいようですが、自我が中心になっている私たちには難しいといえます。なぜなら小さな自我（いわゆる私、分別的知性）によって、自我を超えた大きなのちのはたらき（大道）を掴むこと、知

ることはできないからです。

けれども、この大いなるのちには大いなる慈悲の心がこもっていて、有難いことに、この大いなる大悲のはたらきが、私たちに名のり、喚びかけ、大悲を知らせてくださる、それによって私たちは大いなるいのち（大道）を知る（見知）ことができるのです。

この大悲のはたらきの深さ、有り難さは『仏説無量寿経』に、釈尊が法蔵菩薩の本願とその成就というお話として詳しく説かれています。ここに大いなる大悲のいのち（光寿無量）のはたらきが実に詳しく反映されているのです。ですのでこのアミダ仏の本願のはたらきを聞いて信じる人は実際に大いなる大悲のいのち（アミダ仏）にであうことができるのです。

次に「大道を見知せば、自己にあるものに不足を感じることなかるべし。」といわれます。人が幸せを求めても「道は近きにあり、これを人は遠くに求む」とい

言葉がありますように、自分の人生の安定を、自己の外（財産や地位や能力や権力や運命など）に求めるとか、あるいは自分の心や考えや受け止め方など自分の内心を確かにしようとするのが通常です。しかし、私たちにとって人生を安定して生きる道は「遠くにはない。脚下にある」と清沢先生はいわれるのです。私たちが求める先だって充実して生きる道（大いなる普遍的な道）はすでに与えられているのです。ただそれを知らないだけです。一番身近な自分のいのちにはたらいっている大いなるいのち（如来）の事実、そこに安定の道を見出すのが大事なのです。

ここに道、すなわち光寿無量であるアミダ如来を見出すと、「大道を見知せば、自己にあるものに不足を感じることなかるべし。自己に在るものに不足を感じざれば、他にあるものを求めざれば、他と争うことなかるべし。」といわれるのです。

この如来にであうと「満足と他者との平和」が功德として与えられるといわれま  
す。清沢先生は「自己人生への満足」を非常に大事に  
みています。自己人生に満  
足感があると、

「絶対は吾人に満足を与え、  
反対は吾人に不満を与う。

ゆえに満足を生ずるものは  
善なり。不満を生ずるものは  
悪なり。満足あれば無欲  
心あり、無欲心あれば不動  
心あり。不動心あれば**慥勇**  
あり。慥勇あれば無畏心あ  
り。無畏心あれば**精進**あり。  
精進あれば克己あり。克己  
あれば**忍辱**あり。忍辱あれ  
ば不爭心あり。不爭心あれ  
ば和合心あり。和合心あれ  
ば社交心あり。社交心あれ  
ば同情心あり。同情心あれ  
ば慈悲心あり。」

といわれ、ここに人生にお  
ける倫理の基礎をみていま  
す。

なぜ人にやさしくなれな  
いのか、それは自分の人生  
に不足があるからだといひ、  
人にやさしくなるのは「自  
分の人生に満足感・充足感」  
があることによつてだとい

われます。これは実際そう  
なので説明がいらぬほど  
です。ここで「絶対」とは  
如来であり大道であります。  
自分の人生に不足不満があ  
つて、その物足りなさを満  
足させようとして外のもの  
に求めると、必要以上に欲  
求してしまいます。これを  
仏教で「貪欲」といい、こ  
の物足りようが満足しない  
と他（人と社会）に対して  
怒り腹立ちが盛んに起こつ  
てきます。これを「瞋恚」  
といい、貪欲とともに大き  
な煩惱であります。ただ、  
この瞋恚は「私憤」であつ  
て、社会の不正に対する怒  
りのような「公憤」とは違  
います。

ときどき、「人生に満足す  
ると、そこに腰を下ろして  
しまつて進歩しなくなる」  
といわれることがあります  
が、むしろ逆で満足感があ  
れば「**精進あり**」で、人生  
に生きがいを感じ、努め励  
もうとする元氣が出てくる  
ものです。人生に不足があ  
り空しくなると、心が落ち  
込みやすくなります。そし  
て、

「自己に充足して、求め  
ず、争わず、天下何の処に  
か之より強勝なるものあら  
んや、何の処にか之より广大  
なるものあらんや。かくして  
始めて、人界にありて**独立自  
由の大義を發揚し得べきな  
り。**」

といわれます。アミダ仏に  
触れて充足した人はこの世  
での真の勝利者であり、広  
い世界觀に生きる人になる  
と讃えておられます。なる  
ほど釈尊は「我は世に勝て  
り」といいまた「**自他一体**」  
の広々とした世界觀に生き  
られましたので、自己に充  
足した人はこれに連なる人  
といつていいのでしよう。

ところでここでいわれる  
「**独立自由の大義**」とはど  
ういう意味でしょうか。こ  
れは『**歎異抄**』の第七章に、  
「念仏者は、**無碍の一道**な  
り。そのいわれいかんとな  
らば、信心の行者には、天  
神地祇も敬伏し、魔界外道  
も障碍することなし。罪惡  
も業報も感ずることあたわ  
ず、諸善もおよぶことなき  
ゆえに、**無碍の一道なりと  
云々**」

とありますが、こういう内  
容だと受け取られます。「**独  
立自由**」とはここでいう「無  
碍の一道」ということで、  
さし障りや困ることが降り  
かかつてきても、この障り  
の多い人生生活において、

お念仏をいただいてアミダ  
如来にであつた人は、それ  
によつて人生に失望したり、  
落ち込んだり、悩みが重な  
つて疲れ果てることがない。  
障りだらけの人生の中で、  
アミダ仏と共に生きぬく。

アミダ仏に支えられ、アミ  
ダ仏の御いのちに乘せられ  
運ばれていくのでありまし  
よう。そして、自らの為し  
た罪惡の結果（業報）がい  
ろいろ現れてきても、その  
結果の苦に軽やかに耐えて  
いき、また自分のなす善行  
を自分の依り処にしようと  
したり、自分の善行によつ  
ての幸運を期待しないので  
ありましょう。いわんや魔  
界外道の類によつて引き  
回されない。それゆえ「天  
神地祇も敬伏する」のであ  
つて、神々を頼みにして祈  
禱をしたりまじないをする  
必要は全くなくなるのであ

ります。  
こうした人生をあたえら  
れ、この道を証していくこ  
とが「**独立自由の大義を發  
揚**」するすがただといえま  
しょう。

そして結びに、  
「此の如き自己は、外物他  
人のために傷害せらるべき  
ものに非るなり。傷害せらる  
べしと憂慮するは、**妄念妄想  
なり。妄念妄想は之を除却せ  
ざるべからず。**」

といつています。「此の如き  
自己」というのは、アミダ  
仏の大いなる大悲のいのち  
と一つとなつているいのち  
の自己です。このような自  
己は、外物他人によつて壊  
れもしないし、なくなりも  
せず、傷もつかないのち  
です。もし傷つきこわれて  
しまふようないのちの自己  
と思うなら、それは**妄念妄  
想**にすぎません。もしその  
ように思つて煩い、不安に  
思うなら、その誤つた思ひ  
を取り除かなくてはならな  
いと清沢先生は仰せになる  
のです。

以上、清沢先生の人生観を述べてみました。このような人生観を持って人生を送ることはレベルが高すぎてなかなか難しいように思います。

ただ清沢先生のいわれる「何ものにも妨げられない自己」を知ること、それに触れること、それは万人の現在に開かれています。

この自己にあえば、この自己の功德が人生生活に徐々に現れてまいります。今回事べた清沢先生の人生観もこの功德の延長上にあります。これに従って歩むことを外にして仏教の教えはないし、真の宗教もないと思います。本願念仏の教えも、このような自己を知り、このような自己に生き、このような自己の願いに従って生きる道でありましょう。

こうした人生観をすぐに身につけることは難しいですが、少なくともこういう方向に向って生きることはいくらでもできるでしょう。

(了)

## 信心夜話

仏法とはこの口仏様に借<sup>か</sup>して上げることあります。今南無阿弥陀仏と聞えるからには、私の全体が仏様のものなれど、私等は自分の物と思うから、思っているから、「その口借してくれよ」と仰せられます。

(『松並松五郎念仏語録』より)

\*

アミダ仏様はひとり一人を我が独り子とみそなわし、私たちのいのちの真実の親であることを見失ってさまよっている私たちに、ご自身を知らせ、ご自身を与えようとしておられます。私たちは考えたり思案したりする私の力（自我のはからい）によって、アミダ仏にであうことができないかのように思っています。人（分別的自我）の方からアミダ仏にあうことはできないのです。そのことを知りきっておられるアミダ仏様はアミダ仏の方から、ご自身を知らせようとして五劫思惟し、南無阿弥陀仏の声となって私

たちに喚びかけられます。

人の口において、アミダ仏ご自身が「南無弥陀仏」と称えてくださるのです。アミダ仏が私の口において「称えてくださる」のです。その声が私たちの口に出てくださる南無阿弥陀仏です。松並さんに「称えてくださる称えましょ」という有難い言葉があります。アミダ仏が私の口において称えてくださる、これが元にあつて私の口のお念仏になつてくださるのです。

こういう背景があつて、アミダ仏は「どうかお前の口を借してくれよ」とのお心ゆえ、私は「この口仏様に借して上げる」のです。ではなぜ私たちの方から貸してあげるという風に思ってしまうのかといえば、私たちは「私の全体が仏様のものなれど、私等は自分の物と思」っているから、それを知っているアミダ仏だから「その口借してくれよ」と仰せられるのです。

ここで「私の全体が仏様のもの」だと松並さんはいいます。これは「仏の智慧」から出た言葉です。私のいのちの全体がアミダ仏のいのちの他

## 住職雑感

にはありません。私たちは自分のいのちを「自分の物と思う」、これが迷いの始まりです。アミダ仏のいのちの中に在りながら、このいのちを「私のものである」と思い、アミダ仏の御いのちから自分を切り離し、愛着し、こうして生老病死の苦（不安）の中で右往左往しているのです。この私に「お前の口を貸して称えさせてくれよ」とアミダ仏は仰せられ、その言葉に従つて「アミダ仏にこの口をお貸しする」これが称名念仏しているすがたです。この称名念仏において、アミダ仏は「ここにいる、汝を撰め取っている、安心してくれよ」とのお心が知らされるのです。

(了)

こうしてアミダ仏とともに生き、そうしてこの世を終つてアミダ仏の大悲のいのちの領域に至らしめてくださるのです。

以前大谷派の難波別院から依頼され「極重悪人唯称仏」という正信偈の一句について小文を書き、それが別院からリーフレットとして発行されました。そうしましたら、これについて一

五分ぐらいの内容で youtube で話をせよということになり、それが昨年十二月にアップされました。なにしろ時間制限ですので、一応原稿を作り、それをモニターに出したのを見ながらの話でした。とてもモニターが小さいので字を追うのが難しく表情が乏しくなっております(笑) youtube の法話は『みどう法信』(大谷派難波別院主催)というチャンネルの中を、youtube で検索されたら幾つかの法話の中に出てくると思います。大阪教区21組のチャンネルにも別の法話があります。

## 謹賀新年

真宗大谷派 念佛寺

(責役・総代)

令和八年元旦

土井紀明 中川政二  
土井眞由実 吉田徳子  
中村泰司 中村律子